
メルマガ しっかい！

NPO 法人市民福祉団体全国協議会・復興支援事務所

NO.2 (2012年5月21日発信)

歩もう	つながろう
支えよう	広げよう
学ぼう	増やそう

★被災地関連情報★ 問い合わせは連絡先へ直接行ってください。

【中古ミシン提供募集】 山元町仮設の女性グループ支援
 連絡先[ささえ愛山元・中村怜子 080-3031-5722]

【就労支援】 たすけあい佐賀緊急雇用募集！
 被災地の方、佐賀市で2名就労受け入れます。
 研修を受けながら給与支給
 連絡先[山田健一郎 0952-23-6950]

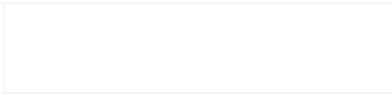
遠野はゴールデンウィークにやっと桜が満開となりました。

被災地のゴールデンウィークは、どこの仮設集会所もイベント盛りだくさんだったようです。その中のひとつ陸前高田市にある気仙大工左官伝承館さんで行われた「竹に親しむ音楽会」に行ってきました。茅葺き屋根の民家の中で聴く尺八や横笛の音色は西洋的な大きなホールで聴くのと違う優しい音色でした。演奏者の柴田旺山さんは、平成「即位の礼」園遊会をはじめ公式行事での演奏など国内外トップレベルの方です。聞きにきていた方は「震災でもなければこんな遠くまで来てもらえるような方じゃない」と。確かに超一こ寄り添った演奏をしてくださいました。

被災したことで、被災者の中には、被災したことをポジティブに捉えて“被災したおかげでこれまで見たことも聞いたこともないような楽しいことをたくさん体験させてもらえる”とおっしゃる方もいらっしゃいます。一方、地元の支援者（元々医療、福祉関係の方）の中には「これまで何もなかったのだから、あれこれイベントをやる必要ってあるのか」という意見も最近、耳にします。

炊き出しイベントは賛否両論。住民の方向けのはずが余ってしまって、支援員さんやボランティアさんをご馳走になっているという場面を見かけるのも事実です。需要が下降気味の炊き出しですが、その中でも人気があった炊き出しのコツを聞いてみると、有名料理店の方が作っている、調理スタッフに地元の人が混ざっている、そして重要なポイントは地元の方に味見をしてもらっているということでした。

余談ですが、新宿ゴールデン街のバーが仮設住宅敷地内で野外バーを開催というユニークなものもありました。ちょっと行ってみたい気になります。参加しなかったので盛況ぶりはありませんが。



六日の菖蒲・十日の菊

事務所が中心となって宮城県「新しい公共」事業4次募集に応募し採択された。企画名称は「仮設住民によるコミュニティカフェ等推進事業」。

応募要項発表から提出まで正味一月あまり。あわただしくも学びの多い作業となった。紙面の都合で企画案をすべてお伝えできないが、2次のプレゼン（5分間）で訴えたことは以下のことだった。

★私たちは阪神淡路の震災の仮設の教訓から、「仮設住宅に集会所」をセットするという知恵をえた

★今度の震災からは、その「集会所」を、単なる「コミュニティスペース」から「アトリエまたはファクトリー的な空間」に進化させるチャンス！というメッセージを受けた

★本企画は、平板な自立支援プログラムにとどまらない。次なる大規模災害発生時対応を意図した。

この成果により、行政の仮設施策が、これまでの「住居」のみを提供するから、「期間限定の”地域”を創る」という、施策のパラダイムシフトを促すものになる』

要約すれば、「災害起きたら、仮設ごとにNPOをひとつずつ創ろう！その活動を自治会づくりに生かしつつ、収益事業として展開して、全国の支援者とのネットワークを構築する」ということ。

今回の申請を通して強く感じたことが3つ。一つには、市民協会員：藤田・伊藤さんの地域での活動実績。それなくして2枚の市長推薦書はいただけなかった。二つ目は、「新しい公共」事業案に今までの慣習を打ち破る独創性に重きが置かれた。三点として、NPO等のマネジメント（コンプライアンスというべきか）姿勢が厳しく問われた、ということ。おそらく審査会はその3点に絞って採否決定を下したであろうと推察している。

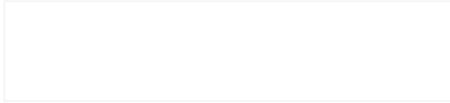
1ヶ月遅れの事業開始となるが、市民協のネットワークをフルに活用し次代に残せるモデル事業をめざす覚悟である。本事業の愛称を「ショップ（SHOP）」とした。「仮設住民による・・・云々」ではあまりに冗長。

S=仙台 H=東松島 O=作戦 P=事業 の頭文字を並べた。「ショップ」とは仮設ソーシャルビジネスのシンボルとっていいであろうか。

私も藤田さんも「この事業は昨年秋には実施していたかった。今となっては旬を過ぎたもの」という意識はある。自己矛盾ではないか？といわれるかもしれないが、仮設住宅の環境はそれほど激しく変動している。立案時点のイメージに縛られすぎでは事業の目指すゴールを見失いかねない。

この事業に必要なものは、成功体験や慣習にとらわれず、環境の変化に対応して躊躇な

く転換する勇気だ。それゆえ我々のチャレンジは、常にフレキシブルでありたい。仮設の変化を見据えて、その先をみた花を咲かせたい。スタートでは”菖蒲”に遅れたが、ゴールの”菊”は実現する。



3つの被災県の中でも、原発問題で苦悩する福島の仮設の状況はかなり複雑で課題も困難を極める。この4月から市民協&WACバスツアーが、初日福島を訪問することになった。先日も20名を超える方々が、福島の被災者との交流に臨んだ。ある参加者の声「TVで被災地を訪れるボランティアとの交流場面を見ていると、”ありがとう”という感謝の言葉が飛び交い、なごやかで温かな雰囲気を感じていた。今回もそんな情景を期待していたが、とんでもなかった。最初に浴びせられた言葉は”おまえ等何しにきた!”福島と宮城の被災者の心情はまったく異質なものだと思った。福島の方々にはどこにもぶっつけようのない怒りが渦巻いている。それを今回きちんと受け止められたという自信はないが、少なくとも福島の思いを現地で肌で感じることの大切さを痛感した」

福島市在住の会員・須田弘子さんは昨年から事務所に近い2カ所の仮設に毎週赴いて「ふれあいカフェ」を行ってきた。ここは原発で強制避難を余儀なくされている浪江町の方々の仮設である。浪江町民の仮設だけで7カ所市内にあるという。

須田さん等は、自施設にこのほど完成する常設型居場所ホールのオープン記念に、これら市内7つの浪江町仮設の住民交流会を開催しようと準備を進めている。ばらばらに生活する寂しさや不便さを少しでも和らげてほしいとの願いを込めている。日程は7月15日(日)。県外からも多数応援や激励に訪れてほしいと思う。